

Title	昭和四十年秋期史学科見学旅行記
Sub Title	
Author	井上, 百合子(Inoue, Yuriko) 小川, 節子(Ogawa, Setsuko) 菊池, 泰子(Kikuchi, Yasuko) 来栖, 克子(Kurusu, Katsuko) 井上, 卓也(Inoue, Takuya) 龍原, 武嗣(Tatsuhara, Takeshi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1966
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.38, No.4 (1966. 3) ,p.131(565)- 134(568)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	彙報
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19660300-0131">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19660300-0131</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

# 彙報

## 昭和四〇年秋期史学科見学旅行記

一月二日、午前九時三十分天理駅前に集合、一行は伊木・清水・河北・神山・伊藤・米田・志水・鈴木の各先生と史学科の学生九〇余名である。まず天理教会を訪ね、神殿・教祖殿を見学。総檜・入母屋造りの巨大な建築であり、信仰の盛況を感じさせる。午後到天理参考館を見学。此処には主に民俗・考古資料が収められている。その地域はアジア・アフリカなど広範囲にわたり、その種類も家具・食器・装身具・祭具・狩猟具と多様で、それ等が地域別によく整理展観されており、各地の生活様式の相異・類似がよく理解出来る。その他天理市周辺の数多い古墳から出土した刀・鏡・棺等の優品が陳列されていて、注目された。

参考館を出てから、古墳見学グループと天理図書館・石上神宮見学グループに分れる。外に出てみると、周囲になだらかな山が望まれ、奈良に居るという感じを受ける。天理図書館はその蔵書は八五万冊にのぼり、内容は、宗教・民族・国文学等を主としているという。我々が見学したのは、欧州の古地図・古地球儀の類と、明治の文壇で活躍した人々の自筆の原稿や書である。両者とも日ごろあまり接することのない物だけに、興味深いものであった。石上神宮に向う途中から山辺の道になり、古代の感傷へ誘われる。石段を上る

と左手に楼門があり、南北朝の頃のものが上層・下層はやや年代が違ふと考えられる。その奥に七間四間の檜皮葺の優美な拜殿がある。これは平安朝の古風を残す鎌倉時代の遺構であろう。楼門の向かいに摂社出雲建雄神社の割拝殿がある。洗練された墓股・素直な舟肘木・瀟洒な疎垂木などを感興深く拝観した。見学を終えて、我々を待つ天理の宿舎へ。

(井上百合子記)

一月三日、大和三山に囲まれた明日香の里は、かつて政治・文化の中心地として多くの歴史が刻まれた地とは思えぬ、静かで平凡な農村である。平城遷都以来、ここは再び政治の中心となる事はなかつた。その為、当時の建造物や遺品は、平城京に移されるか又はこの地で老朽し、荒廃してしまつたのである。わずかに、路傍の草むらや木立の中に礎石・瓦片を見る事が出来るとはいえ、長い年月の間に、多くの遺跡は地中に埋没し、発掘調査を行わない限りその姿は知り得ない。初めに訪れた藤原宮跡は、比較的早くから発掘が開始されたもの一つである。藤原京は平城京の様に長方形をなして、縦横に大路を通じ、坊を区画する。坊は北から教えて十二条まで、朱雀大路から東と西へそれぞれ四坊あつたという。昭和九年以降数回にわたる発掘調査により、朝堂院の諸殿堂とその回廊の跡が判明し、南北六一六メートル、東西二三六メートルに達する朝堂院の規模は平城宮・平安宮のそれよりも遙かに大きいことが明らかになつた。いまは学校の庭端にその大極殿の土壇を残すのみとなつている。本薬師寺の標示は、曲がりくねつた田んぼ道の傍にひっそり立て

られていた。農家とも寺ともつかぬ建物の庭先に巨大な礎石が並んでおり、それらは当時の偉容を偲ぶに十分な量感を与えてくれる。薬師寺は天武八年に、皇后の病気の平癒を願って藤原京に建られたが、のち奈良西の京に移建された。その伽藍配置や建物の規模が全く同じだという事、塔心礎の形式だけが反対であるという事、東塔の金堂は旧地に保たれたのかも知れないとの説など、本薬師寺と西の京薬師寺に関する問題は多い。塔跡付近の草むらには、当時の瓦の破片が四散していた。

本薬師寺址を後にあぜ道を伝つて山田寺へ向う。途中、宮寺として重要視されていた大宮大寺の塔址に行きあたつたが、ここが天武朝の頃、国家の大法会や祈禱が行われた寺だと思つたと、塔址は勿論側を流れる小川や、石、草に至るまで、宮寺にゆかりあるものの様に思われる。

目指す山田寺は、一面黄金色の稲の中に小さな塚となつて、塔址をとどめているにすぎない。蘇我倉山田石川麻呂により建立された寺であり、また彼が自殺したところでもある。四天王寺式伽藍の代表的な遺跡というが、荒廃がはなはだしい。なお、鎌倉初期この講堂の本尊が興福寺の東金堂衆により奪取されたというが、このの間もなく山田寺は廃滅したものであろう。

夕暮も迫つてきた頃川原寺へ。他の諸寺とともに都に近い寺として重視されていたに拘らず、平城遷都の折奈良へ移されなかつたのは何故であろうか、そののち急速に力を失つたものと思われるが、その理由は寺の創立の由緒と共にいまも解明されていない。現在、

本堂件近に白大理石の礎石の並ぶ堂跡があり、東南の芝地には塔趾も残つており、おそらく川原寺は建築的にも、また政治的にも白鳳時代の代表的な寺院であつたに相違ないのだが。

(小川節子・菊池泰子記)

一月四日。西大寺駅から東に約一キロ。右手に広い草地がみえてくる。ここが元明天皇和銅三年に都を遷してから、桓武天皇延暦三年までの七代七四年間、平城宮があつたところである。平城京は東西約四・二キロ、南北約四・七キロの広大な都市であつたが、宮趾はその北部中央に属する。我々はまず朝堂院の正殿である大極殿址土壇に上り、発掘に携わつている佐原真氏より平城宮の発掘調査の概況について説明をうかがう。続いて発掘現場に導びかれ、縦横に並ぶ掘立柱の痕跡、木樋を用いた暗渠、溝状の礫石敷、そして巾広い轍あとなどをまのあたりに見るとき、千二百年むかしの平城宮の宮廷生活があざやかに脳裡に描かれる。つぎに出土遺物の一部を収めえ仮陳列館を見学する。そこにはせいろ型の井戸杵をはじめ、土器・木器・瓦類などが編年分類され展観されていた。

午後からはコース別に次の目的地へ向う。我々は右手に法華寺の屋根を眺めながら、古墳巡りを始める。まず最初の宇和奈辺古墳は土を盛り上げたため必然的に出来た濠をめぐらし、墳丘に小松が茂つている前方後円墳である。丘上には円筒埴輪が数千個も樹立していたと言ひ、またくびれ部の左右に車形の造り出しをもつていて、この古墳の西隣りに並ぶのが小奈辺古墳である。同似の前方

後円墳で、いずれも陵墓参考地とされている。西北方に散在する多数の小さな円墳・方墳は、大方陪塚であろうと言われる。両古墳の間を過ぎて歩き続けると、左手に磐之媛陵がある。これら三つの雄大な前方後円墳は、丘陵端に南面して営まれ、また三段築成で形状も相似しており、同時期・同族の墳墓であろうか。

さらに西へ、行き交う人もない砂利道を歩くと正面に整然たる前方後円墳の日葉酸媛陵が見える。大正年間に盗掘にあつたが、その後の調査で、仿製鏡・石製模造品などの副葬品が見出され、また特殊な内部構造をもつことが知られたという。さらに西側の成務天皇陵、西北の巨大な神功皇后陵等を見て、暮かけた秋の佐紀野路を秋篠寺へ向う。寺は秋篠の里の雑木林の中にあり、法相六祖の一人善珠が開基と伝える。平安末に兵火で伽藍の大半を失い、今ではただ再建の本堂と若干の仏像とを残すのみである。本堂は鎌倉初期の様式を示すが、前面吹き放しの部分を変更している。その本尊薬師三尊像も平安時代の作ではあるが、本来一組のものではなかつたらしい。また技芸天は頭部が天平の乾漆で、体軀は鎌倉の木造補修というが静かな優しい表情には魅かれるものを感じた。

(栗栖克子記)

一月五日、生憎の曇天。目的地の浄瑠璃寺へ到着したのが一時半。この寺は本尊として九体の阿弥陀如来坐像が安置されているところから、九体寺とも呼ばれている。境内に入るとすぐ目に飛び込んで来たのが、数少い藤原時代の蓮池。池水そのものは美しいとは

言えぬが、池の右手の本堂、左手にある三重塔との調和が美しく感じられる。

本堂内へ入ると、須弥壇上に本尊である九体の阿弥陀如来坐像及び地藏菩薩、不動明王像等が並ぶ。阿弥陀如来坐像は九体何れも藤原時代の定朝様式のもので木造漆箔。九体の像の中で、中尊が一際大きく、殆ど欠損もなく保存は完璧に近い。その面相は極めて、柔和、穩健であり、心の底まで見抜かれてしまいそうな気がする。建立当時の人々の苦心及びこの像に対する人々の信仰の深さが偲ばれた。本尊の左右に各四体の比較的小形の如来坐像があり、その光背は中尊の金漆箔のそれとは対照的に、簡素な板光背であつたのが印象に残る。吉祥天立像はバラモン教の影響を受けたものであると言われ、極彩色の施された小像で、顔が意外に現代的な感じがしたのに驚く。この像は開扉の時期が限られているが、幸いにも観る事が出来た。

他に本堂には不動明王・二童子立像・四天王立像等が安置されてあつた。諸像について説明を受けた後、本堂を出て、これも又藤原時代に建立された三重塔へ。純然たる和様の優雅な塔姿に興味をもつ。

一時半頃、浄瑠璃寺を後にして岩船寺へ。途中かなり急な坂道で、その上前日の雨のせいもあつて難行。境内に入ると先ず浄瑠璃寺に比べて何かもの寂しさの漂いを感じる。多分、寺そのものの衰微としたために生れた感じなのであろう。

寺側のユーモラスな説明振りに、一行苦笑しながら見学する本堂中央には、阿弥陀如来坐像が安置されてあつた。この像は木造漆箔

丈六の巨像で藤原初期のもの。漆箔はかなり剥れ、かつ変色しており、光背は二重円光の部分のみ存在し、綵体的に地味な感じである。むしろ浄瑠璃寺の中尊に豊潤さ、落着き、柔和さを感じる。他に本堂には四天王立像、普賢菩薩像が安置されていた。

本堂より出て左手一段高い所に建っている三重塔へ。吉野時代の建築。やはり地味な感じを受ける。内部に入ると天井が建築工法を見学出来る様に一部開かれていた。塔の心柱が、途中で切断されており、それを太い鎖が支えて塔のバランスを保っているとの説明を受ける。塔より出ると、午前中曇っていた空も完全に回復して、明るい陽差しが地に落ちていた。(井上卓也記)

一月六日は馬見古墳群巡り。天理教会の御好意で小型バスを出していただき、連日専ら足による古墳巡りを続けていた我々は、奈良の秋をドライブする。

馬見古墳群は奈良盆地の西側に連なる馬見丘陵に沿って存在し、大和盆地東側にある柳本古墳群と並んで有数の古式古墳群である。

見学し古古墳の内から主なものを順に拾ってみる。乙女山古墳は前方部が短い帆立貝の様な形をしており、類例の少く帆立貝式と呼ばれている。形の良い後円部は柔らかな緑に覆われ、優雅な雰囲気は乙女の名に相応しい。草を分けて小高い所に登ると、前方部が僅かに伺え、陪塚が神妙に控えているのが眺められた。佐味田の宝塚は、車から降りて両側に溜池のある小径を二〇分程歩いた丘陵地帯の奥まった所にある。先生は二階建の石室と家屋文鏡を出土してい

ることで有名と説明された。

昼食後、巢山古墳を見学。これは中期の典型的な前方後円墳で、濠には水が満ち、静かな美しさを示している。この付近一帯は五世紀を中心し葛城氏が勢力を張っていた所と言われ、その一族のものと考えられるとの説明。築山古墳は中期の前方後円墳で相当大きなものである。濠は干からびて、ひび割れた底は病んでいゝ古墳という感じだが、その為に造り出しの部分がよく見えた。周囲にはすっかり家が建っている。古墳は周囲も共に保存しておくことが是非とも必要だ。古墳巡りの後、大和歴史館の埴輪展を見学。展示数は多くない。陶棺、象形・円筒埴輪、埴輪のもとになったと言われる壺等。殆ど手のつけられていなかった稲の刈り取りも、この旅行の間にすっかり終り、窓外の景色も日が傾くと、急に寒々としてくる。数日前迄の秋の日を浴びてまばゆいばかりの稲海が懐しく思い起された。奈良駅にて解散。(竜原武嗣記)

### 三田史学会例会

昭和四十一年一月二十八(金)二九(土)日。三一一番教室(国史)

四三四番(東洋史)五〇一番(西洋史)

昭和四十年卒業論文発表会

昭和四十一年一月二十九日(土)午後五時 西校舎学生食堂

卒業生送別会